

第45回

日本ケルト学会

研究大会 プログラム



日時: 2025年10月4日(土)～5日(日)

会場: 大東文化大学・板橋キャンパス

(東京都板橋区高島平1-9-1)

会場:1号館4階10420教室 (控室:10419教室)

主催: 日本ケルト学会

大会責任者 小池剛史(大東文化大学文学部)

連絡先 bachgenjapaneg@gmail.com

🌈 どなたでもご参加いただけます(会費無料)。

🌈 ハイブリッド形式で開催します。講演・発表は会場で行いますが、オンラインでも視聴できます。リンクについては、会員MLにてお知らせします。

第45回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月4日(土)

13:00～	受付開始	
13:30	開会挨拶	代表幹事 森野聡子
13:30～14:15	研究発表 1	コナン・ドイルと「ケルト」 発表者 森野聡子 司会 不破有理
14:15～15:00	研究発表 2	Aberystwyth, NLW, Llanstephan MS 34 所収のウェールズ語版 聖ウィニフレッド伝の特徴——ラテン語版と比較して 発表者 中川健司 司会 山本信太郎
15:00～15:45	研究発表 3	マーメイド妻とアザラシ妻 発表者 岩瀬ひさみ 司会 辺見葉子
16:00～17:30	講演	アイルランド語の正書法と標準アイルランド語 講演者 梨本邦直 司会 平島直一郎
18:30	懇親会	オステリア ピツカンテ ウノ(東武練馬駅から徒歩3分) (大会一日目終了後、無料スクールバスで移動します)

10月5日(日)

10:00～	受付開始	
10:30～11:15	研究発表 4	土地、言語、抵抗——土地戦争とスコットランド・ゲール語のアイデンティティ 発表者 山田祐育 司会 米山優子
11:15～12:00	研究発表 5	『ブリクワウの饗応』 <i>Fled Bricrenn</i> とケルト的伝統?について 発表者 平島直一郎 司会 梨本邦直
12:00～12:15	総会	
12:15～13:15	昼食	
13:15～16:00	フォーラム・オン	ケルト諸語における綴り字法の諸問題 司会・趣旨説明 小池剛史
	発表 1	ウェールズ語綴り字法の標準化における諸問題——『ウェールズ語正書法』 (1823年、1928年)の検証から—— 発表者 小池剛史
	発表 2	スコットランド・ゲール語の綴り字法に関する社会言語学的考察——17世紀以降 を中心に 発表者 米山優子
	発表 3	ブルトン語の綴り字法をめぐって——普及と独自性の狭間で 発表者 梁川英俊
16:00	閉会の辞	大会責任者 小池剛史

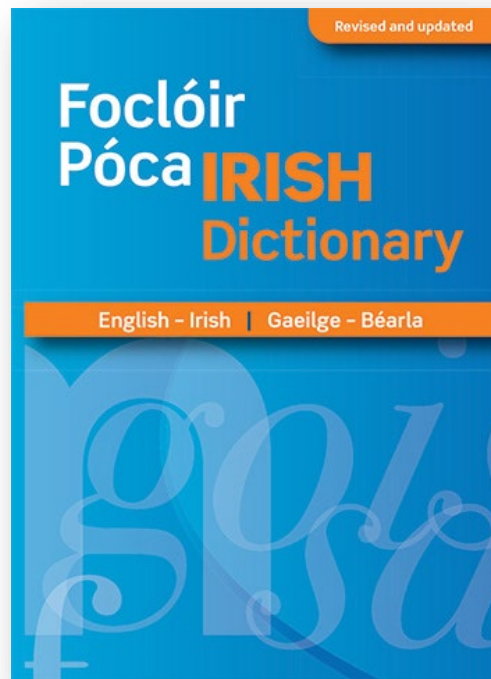
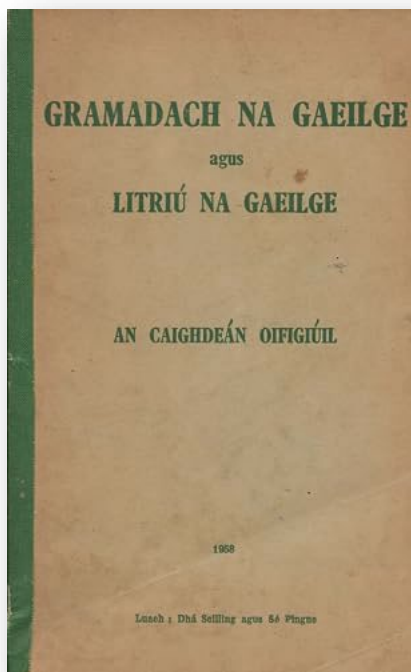
講演

アイルランド語の正書法と標準アイルランド語

Irish Orthography and Standard Irish

講演者： 梨 本 邦 直
(法政大学兼任講師)

アイルランド語の正書法は「公式標準」 *An Caighdeán Oifigiúil* と一般に呼ばれ、1958年政府によって『アイルランド語文法と綴り』として公刊された。以後、書き言葉の標準として公文書、放送、書籍に用いられ、教育現場でも広く採用されてきた。2016年には約60年ぶりにその改訂版が公表された。まず、この「公式標準」によって、どのような方針の基に主要三方言の違いを踏まえながら文法と綴りが制定されたのかを概観し、残された問題点について論じる。つぎに、話し言葉において、書き言葉の「公式標準」が大多数のアイルランド語習得者と少数派の三方言母語話者にどのような影響を及ぼしたのか、さらに、習得者たちの話し言葉は、社会で最近どのように評価されているかを論じる。最後に、1986年オブイール編の『ポケット辞書』 *Foclóir Póca* によって提案された発音の「中央方言」 *Lárchamúint* がなぜ話し言葉の標準として普及しないのか、アイルランド語学習者の視点から評価を加えてみたい。



ケルト諸語における綴り字法の諸問題

Some issues of orthography in the Celtic language

ケルト諸語圏は、アイルランド以外は連合王国(UK)やフランスの一部であり、そこで話されるケルト諸語の地位は国民国家における地域語である。一般に地域語は、その普及のために国家という後ろ盾を持たず、国語が国民に対して持つような強制力を地域住民に対して持たない。

こうした地域語の特徴が最も顕著に現れるのは綴り字法においてである。国家の言語は正書法を志向するが、地域語においては正書法を決定する中心的機関は一般的に存在しない。その結果、地域語においてはしばしば複数の綴り字法が併存し、その普及を妨げる。

今回のフォーラム・オンでは、ケルト諸語圏のうちウェールズ、ブルターニュ、スコットランドの各地域のケルト語における綴り字法の諸問題をテーマとする。これらの地域では綴り字法はどのような原則に則って考案されたのか？ 文字と音の関係はどのようなものだろうか？ 標準的な綴り字法は存在するのか？ 存在するとすれば、それはどのような背景から、いかにして成立したのか？ その選択において政治、宗教等はいかなる役割を果たしたのか？

各々が多様な歴史的・文化的背景を持つケルト諸語圏における綴り字法の諸問題を検討することで、少数言語が継承される条件という一般的な問題にも接近できればと考えている。

(文責：小池剛史)

フォーラム・オン発表

ウェールズ語綴り字法の標準化における諸問題

——『ウェールズ語正書法』(1823年、1928年)の検証から——

Issues on the standardization of the Welsh orthography: studies on *Welsh Orthography* (1893) and *Orgraffyr iaith Gymraeg* (1928)

発表者：小池 剛 史
(大東文化大学)

ウェールズ語の綴り字法は、ウィリアム・モルガンによるウェールズ語訳聖書(1588年)およびジョン・デイヴィスらによる改訂版(1620年)の中で用いられた綴り字が基盤となっている。聖書の綴り字は近代を通じて様々な出版物の中で用いられ続け、一定の標準化を見たものの、子音の重ね字など細部については未確定要素を残したままであった。19世紀末、オクスフォード大学ジーザス学寮にジョン・フリースと師弟の学生らによって設立されたダヴィッツ・アブ・グワイリム協会において綴り字の問題が活発に議論され、その報告書が1893年に英語で『ウェールズ語正書法』(*Welsh Orthography*)として纏められた。本報告で提唱された綴り字法はさらに検討を重ね、協会の主要メンバーであったジョン・モリス＝ジョーンズを中心とするケルト学委員会文学部会により、1928年に『ウェールズ語正書法』(*Orgraffyr iaith Gymraeg*)が刊行された。1928年の『正書法』を以ってウェールズ語の綴り字法はある一定の標準化を達成し現在に至っている。

本発表では、1893年および1928年刊行の二つの『ウェールズ語正書法』を一次資料として、19世紀末から20世紀初頭にかけて、モリス＝ジョーンズを初めとするウェールズ学研究者らの中で、ウェールズ語の綴り字について何が問題とされ、どのような議論が行われたのかを検証し、その結果を報告する。

スコットランド・ゲール語の綴り字法に関する社会言語学的考察——17世紀以降を中心に

A Sociolinguistic Perspective on a Short History of the Modern Orthographical System of Scottish Gaelic

発表者：米 山 優 子
(静岡県立大学)

スコットランド・ゲール語では、16～17 世紀の教義問答集や詩編に、古アイルランド語や中世アイルランド語に基づく綴り字と、スコッツ語に基づく綴り字が併用された。宗教改革の後、同君連合や長老制と主教制の入れ替えなどの社会的変化と共に、発音の推移や借用語の影響を反映した複数の綴り字が存在した。更にイングランドとの議会の合同と二度のジャコバイトの反乱を経て、政府によるハイランド文化の弾圧はゲール語に対する否定的なイメージを植えた。使用域の限定や話者数の減少の一方で、18～19 世紀には、スコットランドキリスト教知識普及協会が用いたゲール語／英語の用語集（1741）や、新約聖書（1767）、旧約聖書（1801）などで綴り字の一貫性が図られた。学術的なアプローチから文法書（1801）や辞書（1828）も作成され、識字教育に用いられた。

現在も綴り字の完全な統一には至っていないが、以上のような背景を踏まえて、学校教育を含む公的領域でのゲール語の使用を想定して『ゲール語正書法規程』（1981）が考案された。1999 年のスコットランド議会開会を機に、地域文化振興の一環としてゲール語の復興を目指す政策が進められ、2005 年のゲール語法を受けて、同規程にも使用域の拡大や新語への対応などに関する改訂が重ねられた。本発表では、これらの一連の動きを概観し、ゲール語の綴り字法の標準化の過程を社会言語学的に考察する。

ブルトン語の綴り字法をめぐって——普及と独自性の狭間で

On Breton orthographies: Between “popularity” and “uniqueness”

発表者：梁 川 英 俊
(鹿児島大学)

筆者がブルトン語を学ぼうとしたとき、ブルトン人の友人から最初に問われた質問は、「で、どのブルトン語を学ぶ？」だった。私たちがひとりで「ブルトン語」と呼ぶ言語は、実際にはかなり多様な言語である。そして、この多様さが象徴的に現れるのが綴り字法の問題においてである。

ブルトン語の綴り字法は、現在スタンダードとされているものだけでZH、H、SS、ヴァンヌ方言Hの4種類がある。その中で最も一般的なものはZHだが、ほかの綴り字法を駆逐するほどの力があるわけではない。それどころか、綴り字法の改良に関する議論は現在も継続中である。

言うまでもなく、綴り字法の多様性は言語の普及にとって大きな障害であり、この認識がブルトン語関係者の間で共有されていないわけではない。にもかかわらず、ブルターニュにおいて綴り字法をめぐるカオス的狀況が改善されないのはなぜなのか？ この状況はいつ、いかなる背景から生まれたのか？ 過去に綴り字法を統一しようという動きはなかったのか？ あつたとすれば、それはなぜ失敗したのか？ 本発表では 18 世紀以来のブルトン語の綴り字法の歴史を辿りつつ、これら一連の疑問に答えてみたい。

研究発表 1

コナン・ドイルと「ケルト」

Conan Doyle and the Celtishness

発表者：森 野 聡 子
(静岡大学)

「シャーロック・ホームズ」シリーズの作者として知られるアーサー・コナン・ドイル (Arthur Ignatius Conan Doyle, 1859–1930) は、アイルランド系カトリック教徒の両親のもとスコットランドのエディンバラで生まれ、イエズス会系のパブリック・スクールを経てエディンバラ大学で医学を学んだ後、イングランドで開業医となった。こうした経歴をもつドイルは、自分の出自やアイデンティティについて、どのように考えていたのだろうか。たとえば、アイルランド問題をめぐる彼の言動は矛盾に満ちており、ユニオニストを自称し、ボーア戦争のプロパガンダで1902年にナイトに叙せられた帝国主義者でありながら、1916年のイースター蜂起に関わり反逆罪となったロジャー・ケイスメントの件では助命に奔走している。著作はというと、ドイルの代弁者であるドクター・ワトソンはヴィクトリア朝中流階級のリスペクタブルな紳士であるが、ヴィランの中には「犯罪界のナポレオン」モリアーティ教授を筆頭にアイルランド系あるいはスコットランド系だと思われる名前の持ち主も複数いる。また『恐怖の谷』(*The Valley of Fear*, 1915) のように、アイルランドに関連した事件を題材にしている作品も存在する。本発表では、アイルランドなどケルト周縁に関係したドイルの発言、そして「ホームズ」シリーズにおける「悪」やヴィランの表象という二つの面から、ドイルとケルトの関わりを考えてみたい。

研究発表 2

Aberystwyth, NLW, Llanstephan MS 34 所収のウェールズ語版聖ウィニフレッド伝の特徴

——ラテン語版と比較して

Distinctive Features of the Welsh Buchedd Gwenfrewy in Aberystwyth, NLW, Llanstephan MS 34: In Comparison with the Latin Tradition Nodweddion Arbenigol y Buchedd Gwenfrewy yn Aberystwyth, LLGC, Llanstephan MS 34: Cymhariaeth â'r Traddodiad Lladin

発表者：中 川 健 司
(慶応義塾大学大学院博士課程)

北ウェールズを代表する聖女ウィニフレッド (St Winifred; ウェールズ名 Gwenfrewy) の聖人伝に焦点を当て、12 世紀に著されたラテン語版と、16 世紀にウェールズ語で翻案された版との比較分析を通じて、ウェールズ語翻案版における特徴を考察する。

斬首後の復活、癒しの聖泉の湧出といった奇跡で知られるウィニフレッドの聖人伝は、1137/38 年に行われた Shrewsbury へ遺骸の移葬を契機としてロバート・オブ・シュルーズベリーによってラテン語で著され、イングランド内でも彼女への信仰を拡大させた。15 世紀に入るとラテン語からウェールズ語に翻案され、現在でも 4 写本に現存している。本発表では、現存 4 写本の中で最も完全にラテン語版の内容を残している Aberystwyth, National Library of Wales, Llanstephan MS 34 所収のウィニフレッド伝を、ロバートによるラテン語版と比較することで、その特徴を探る。特に、移葬譚や、独自に追加された奇跡譚、ウィニフレッドの描き方に着目する。また、こうした異同に関する考察に加えて、15-16 世紀当時にウェールズ語で改めて聖人伝が著されたことの意義を考えたい。

研究発表 3

マーメイド妻とアザラシ妻 Mermaid Wife and Seal Wife

発表者：岩 瀬 ひ さ み
(日本ケルト学会会員)

スコットランドとアイルランドに、世界中に広がる白鳥乙女伝説(The Swan-Maiden)によく似た伝説がある。しかし異類の妻は天から舞い降りてきた天女でも白鳥でもなく、海から陸に上がってきたマーメイドやアザラシ人である。

アザラシ人は海中ではアザラシの姿で、陸に上がれば皮を脱ぐと人の姿になる。マーメイドは半身が魚の姿とは限らず、人間と変わらない姿の場合もある。アザラシ皮を着脱する場合もあり、マーメイドとアザラシ人の境界はあいまいなことがわかる。

これらの地域では20世紀半ばから組織的に口頭伝承の採集が行われてきた。録音資料や手稿はアーカイブに保管され、現在はインターネット上で公開されている。アーカイブの資料から、マーメイドとアザラシ人のイメージと伝承を確認し、なぜこの地域では「白鳥」ではなく、海から来た異類との婚姻譚が多いのかを考察する。

研究発表 4

土地、言語、抵抗——土地戦争とスコットランド・ゲール語のアイデンティティ Tìr, Cànan, Strì – Cogadh an Fhearainn agus Aithne na Gàidhlig

発表者：山 田 祐 育
(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

1870年代から80年代にかけてスコットランドのハイランド地方および島嶼地域（一般にゲール語圏 Gàidhealtachd として知られる）で発生した「土地戦争」は、小作人による農民運動であり、同時にスコットランド・ゲール人の民族運動としても解釈し得る側面をもつ。本報告では土地戦争の解決のための王立調査委員会(ネイピア委員会)によって行われた公聴会(1883年)の証言集をもとに、スコットランド・ゲール人がゲール語という言語をいかに民族のアイデンティティに結び付け、土地に関わる問題として表象したかを検討する。

ネイピア委員会は報告書において「ゲール語はいまだに人口の大部分の母語であり、日常的な言語である」ことを指摘した上で、「ゲール語での教育は許可されるべきであるだけでなく、むしろ推奨されるべきである」と提言し、その教育に補助金を出すべきだとさえ述べている。

調査は土地問題の即時的な解決には繋がらなかったものの、スコットランド・ゲール語という言語的アイデンティティがブリテン社会において可視化された重要な契機であり、民族的自己表象の一局面として注目されるべきである。

『ブリクリウの饗応』 *Fled Bricrenn* とケルト的伝統?について

Über "Fled Bricrenn" und die keltische Tradition?

発表者: 平 島 直 一 郎
(西南学院大学)

初期アイルランド文学作品『ブリクリウの饗応』 *Fled Bricrenn* はアルスター物語群に属し、比較的長編の物語である。この物語はブリクリウが催す酒宴の成り行きと武芸の腕試しの二部で構成されている。その主なテーマは英雄とは何かである。酒宴の主ブリクリウに挑発されたクー・フリンとコナル・ケルナハとロイガレ・ブアダハの三人がアイルランドの勇者は誰かを競い合う。多少冗長な面もあるが、様々なエピソードが織り込まれたこの作品には、他作品との共通点も多い。

本発表では、この物語の内容や成立の背景について言及し、アイルランド語文学の他作品と比較して考察するが、そればかりではなく、他のケルト語文学作品などとも比較する。例えば、この物語は、最後に「首試し」によってクー・フリンが一番の勇者であることをクー・ロイ・マク・ダーリが宣言するが、この「首試し」のエピソードは『サー・ガウェインと緑の騎士』にも類似している。この物語のエピソードの背景や特徴について論じたい。

議題

1. 2024年度決算報告および監査報告
2. 2025年度予算について
3. 幹事定数の変更について
4. 幹事改選結果について
5. その他

報告

1. 来年度の研究大会について
2. その他

会場案内

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1

大東文化大学・板橋キャンパス 1号館4階10420教室（控室は10419教室）

<周辺路線図>



板橋

キャンパス周辺MAP



※無料スクールバスは、大会二日目の 10 月 5(日)は運航していません。東武東上線をご利用の場合、二日目は路線バスを利用して(下記の③または④)お越しください。

■交通アクセス

【電車を利用】

- ①東武東上線 「東武練馬(大東文化大学前)」駅北口、東口下車
無料スクールバスで約7分(スクールバス乗り場まで徒歩5分)
- ②都営三田線 「西台」駅西口下車 徒歩9分

【路線バスを利用】

- ③東武東上線 「東武練馬(大東文化大学前)」駅北口下車
国際興業バス 「浮間舟渡駅」行「高島六の橋バス」停下車
「成増」駅北口下車
国際興業バス 「赤羽駅西口」行、「大東文化大学」バス停下車
- ④JR 「赤羽」駅西口下車
「成増駅北口」行「大東文化大学」バス停下車



正門左手の建物が1号館になります。板橋キャンパス内に入り、1号館正面玄関より館内に入り、エレベーターで4階まで上がってください。

板橋キャンパス1号館

教室 1-0408	教室 1-0410	教室 1-0412	教室 1-0414	大学院 講義室 1-0415	大学院 講義室 1-0416	大学院 講義室 1-0417	大学院 講義室 1-0418	大学院 講義室 1-0419	大学院 講義室 1-0420
教室 1-0409	教室 1-0411	教室 1-0413	教室 1-0414	教室 1-0415	教室 1-0416	教室 1-0417	教室 1-0418	教室 1-0419	教室 1-0420
教室 1-0401	教室 1-0402	教室 1-0403	教室 1-0404	教室 1-0405	教室 1-0406	教室 1-0407	教室 1-0408	教室 1-0409	教室 1-0410

4階

■周辺の宿泊施設

東武東上線 沿線

「東横 INN 和光市駅前」<https://www.toyoko-inn.com/search/detail/00090/>

「東横 INN 志木駅前」<https://www.toyoko-inn.com/search/detail/00324/>

「スーパーホテル さいたま・和光市駅前」

https://www.superhotel.co.jp/s_hotels/wako/

池袋駅周辺には多数宿泊施設がございます。インターネットで宿泊施設を検索しご予約ください。